

コギトの軌跡



愛媛県立宇和高等学校三瓶分校

閉校記念誌

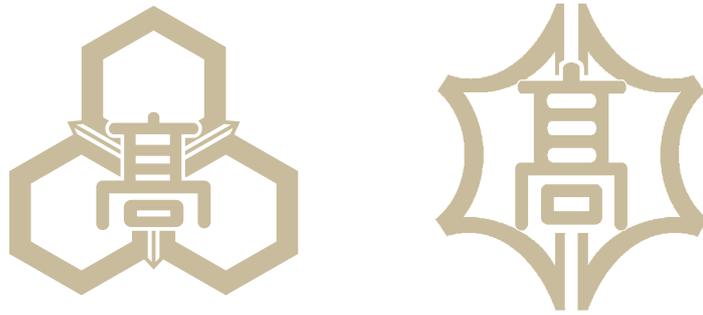








# 閉校記念誌



愛媛県立宇和高等学校三瓶分校

校旗



三瓶高校校旗



宇和高校校旗

校章



第二山下高等女学校胸章



山下西南中学校校章



三瓶高校校章



宇和高校校章



愛媛県立三瓶高等学校校歌

作詞 坂村 真民  
作曲 中田 喜直

一、 たちはなの 花は薫り

みんなみの 潮はひびく

海山の 静かなるところ

真理を究めむ

ひとみかがやき

栄冠の彼方 希望は燃ゆる

希望は燃ゆる

二、 庭に湧く 清き泉

たらちねの ゆかりもふるく

いまもなほ そびゆる 学び舎

よき人となりむ

願ひをこめて

尽きぬ流れに 心を洗ふ

心を洗ふ

三、 西南の 伊予の文化

はまゆふの花と開きて

栄えゆく 美しき三瓶

その名ひびかせむ

理想をいだし

若き命を 鍛えて集ふ

鍛えて集ふ

昭和三十一年十月制定

第二山下高等女学校校歌

一、 金刀比羅山の山松の

操を常に守りつゝ

三瓶の海の濁なき

水を心の鑑にて

女の道をいや深く

修め磨かん諸共に

二、 母その木林の下露の

恵みを思ふ 学び舎に

學ぶ心は垂乳根の

みおやの鳥を本として

女の道を朝夕に

力を勵まん諸共に

大正九年七月七日制定

長井 音次郎 作詞  
曲は「金剛石」のもの

教育目標

三瓶スピリット

思いやりの  
心  
向と  
する  
健やか  
な



# 学校点描と三瓶町



第二山下実科高等女学校時代 仮校舎  
(津布理公会堂) 前にて 第1回入学生  
(大正9年)



大正10・11年頃の女学生



校舎完成直前 (大正10年)



第二山下高等女学校時代の校舎



昭和15年頃の三瓶町



愛媛県立三瓶高等学校時代の校舎とその周辺（昭和42年）

## 創立100周年当時

愛媛県立宇和高等学校三瓶分校時代の校舎とその周辺（令和2年）





# Contents

校旗・校章・教育目標  
分校歌・山下高等女学校校歌

学校点描と三瓶町 ..... 4

## 挨拶

学校長 見島 万代光 ..... 8  
同窓会長 朝井 秀幸 ..... 9  
PTA会長 宇都宮 積矢 ..... 9  
分校長 中井 健晴 ..... 10

新泉の軌跡 ..... 11

## 記念行事

サバイバルウォーク ..... 12  
記念試合 ..... 13  
記念講演 ..... 14  
記念文化祭 ..... 15  
記念体育祭 ..... 16

## 歴史

歴代校長一覧 ..... 18  
沿革の概要 ..... 20  
創立100周年からの足跡をたどる  
..... 22  
在校生 母校と仲間への思い  
..... 28  
校舎配置図 ..... 29

思い出の記 ..... 30

記念講演 馬淵 史郎 氏 ..... 35

職員一同 ..... 40

あの日あの時 ..... 42

編集後記・編集委員一覧



## 発刊のことば



学校長  
兎島 万代光

本校は、海運業の先覚者として活躍し、内閣顧問も務めた山下亀三郎氏が、自分の成功は慈母の薫育のお陰であると、その出身の三瓶町に大正9年、第二山下実科高等女学校を設立したことに始まります。津布理の仮校舎で学び始め、家庭科（専攻科）の設置、山下西南中学校の併設、そして昭和23年に県立に移管され三瓶高等学校となり、昭和25年には定時制が開設（昭和60年度閉校）されました。時の流れの中で、入学者が減少し、令和2年度の分校化に伴い宇和高等学校三瓶分校に校名を変更、令和6年度末をもって閉校することとなりました。この間、学び舎は幾度も姿を変えながらも、「人を思う、郷土を思う」建学の精神は本校の伝統として引き継がれ、卒業生は昨年度末で11,094名を数え、本年度、最後の卒業生が加わります。大正、昭和、平成、令和の各時代を通して、政財界、実業界、教育、文化、芸術、スポーツ等の各界・各分野で活躍する有為な人材を輩出してきました。

第二山下実科高等女学校の往事から本校に湧く「泉」は、本校教育のシンボルとして、時代を超えて、本校生を導いてきました。天の恵みの雨水が大地の濾過を経て、清き泉として湧くように、本校で学んだ知識や経験が各人の中の濾過・熟成を通して、知性として、清き心として湧き出で、若き生命を育んできました。本校に国語教師として赴任した詩人の坂村真民先生は、デカルトの「コギト・エルゴ・スム（我思う、ゆえに我あり）」を引用し、その泉を「コギトの泉」と名づけました。知識や経験を濾過・熟成するには「コギト」、つまり、思索（自分の頭で徹底的に考えること）が必要なことを、「コギト」という言葉で明示してくれました。「コギトの道」「コギトの杜」「コギトタイム」等々、本校には幾つものコギトを冠するものが生まれ、「コギト精神」、常識に安んじない三瓶精神が培われてきました。真民先生は、その教育理念を校歌の一番「海山の 静かなるところ 真理を究めむ」、二番「庭に湧く 清き泉 尽きぬ流れに 心を洗ふ」、三番「若き命を 鍛えて集ふ」等と表現し、以後、校歌が歌い継がれる中で、その理念は、本校生徒・教職員の心に刻まれ続け、人なみから抜きん出て大きく活躍できる「三瓶びと」の育成にもつながってきたと思います。その精神は「三瓶スピリット—思いやりの心・向上する心・健やかな心」とも表現され、最終年度まで、その伝統的な唯一無二の教育活動は輝き続けてきました。

終わりに、記念誌の発刊にあたり、原稿執筆を快くお引き受けいただいた皆様、閉校準備に御協力いただいた皆様、最後まで本校教育活動に御協力いただいた皆様、そして本校をずっと見守りお支えいただいた同窓生をはじめとする地域の皆様、関係者の皆様に衷心よりお礼を申し上げます、発刊のことばといたします。

## 挨拶



同窓会長  
朝井 秀幸

## 三瓶の想い 閉校の時

三瓶分校閉校にあたり、一言ごあいさつを申し上げます。当校は1920年山下実科高等女学校として開校以来、105年にわたり、輝かしい歴史と伝統を築き、地域の発展に多大な貢献をされてこられました。この間、1万1千人を超える有為な人材を世に送り出し、県内外におきまして幅広い分野でご活躍されています。これもひとえに、地域の皆様の長年にわたる暖かいご支援の賜であり、厚くお礼申し上げます。また、同窓会関係の皆様の並々ならぬご尽力に対し、深く敬意と感謝の意を表します。

昨今、地域社会を取り巻く情勢の変化は急激であり、過疎化や少子・高齢化が進むなど多くの課題を抱えています。こうした状況の中で、生徒数の減少などによる高等学校の統廃合が避けられず、2025年3月31日をもって校史を閉じることになりました。これまで当校を巣立った同窓生の皆様にとって、母校の閉校は何事にも代え難い寂しさであり、断腸の思いであると存じます。また、地域の皆様の愛惜の念も深いものがあると拝察いたします。

さて、三瓶高校は私たちが青春を過ごした場所であり、多くの思い出が詰まった素晴らしい学校です。この度閉校になりますが、同窓会はこれからもずっと続けていかなければなりません。そして、同窓会の活動を支援し、皆様と共に未来への一歩として前進していきたいと願っています。今までは三瓶分校の中に事務局を置いていただきましたが、閉校とともに事務局は閉鎖されますので、しばらくは活動休止となりますが、必ず再開してまいります。名称も三瓶高校同窓会として継続してまいります。資料関係については、三瓶文化会館の図書館に保存していただきますので閲覧して下さい。

終わりに、閉校になる学び舎に深い感謝を捧げるとともに、今後も皆さんとの絆を大切にしながら新たな未来に向けて前進していきたいと思っております。引き続き、皆様にとって幸多き日々が訪れますよう心からお祈り申し上げます。



PTA会長  
宇都宮 積矢

## 県立宇和高等学校三瓶分校閉校にあたって

創立105年の歴史と伝統ある三瓶の学び舎が、令和7年3月31日に幕を下ろします。

閉校までの日が1日1日とカウントダウンされていく中、最後の生徒となる14名は、校訓である三瓶スピリットの

- 1 思いやりの心（徳）
- 2 向上する心（知）
- 3 健やかな心（体）

この「心」を胸に、～14人だからできること 全員が輝く学校に～、を生徒会目標に掲げ、日々限られた時間を互いに努力し励まし合いながら、自己を高め、より楽しい学校生活を送れるよう追求し実践してきました。閉校記念学校行事であった、明德義塾高校野球部との記念試合とマリンスポーツは悪天候のため中止となりましたが、サバイバルウォークは快晴のもと、23.4kmを地域の皆様のご声援を受けながら元気に歩くことができました。また、明德義塾高校野球部監督の馬淵史郎さんの記念講演会では、「諦めなければ夢も叶う」と題した「棚ぼた精神」などをお聞きし、貴重な時間を過ごすことができました。その他にも、体育祭や文化祭、中庭イルミネーション、高校生グルメ甲子園in西予など、たくさんの行事を通して大切な思い出がたくさんできました。また、コギトタイム（総合的な探究の時間）では、広報班、防災班、商品開発班の3つの班に分かれて、地域の課題解決に結びつく探究活動を行ってきました。商品開発班では、地元の鮮魚店の企画により、卒業記念にと新商品開発に取り組みました。

三瓶分校に入学して良かった！楽しかった！と卒業できるよう、14人が「心」をひとつにして学校生活を精一杯送ってきました。さあ、いよいよ14人の生徒はそれぞれの進路に向けて新しい一歩を踏み出します。この三瓶分校での経験を胸にそれぞれの道で活躍することを祈っています。

終わりに、創立以来今日までご支援ご協力を賜りました歴代PTAをはじめ同窓会、地域の皆様、学校関係者の皆様に、心より感謝とお礼を申し上げます。

# 挨拶



分校長  
中井 健晴

## 閉校に寄せて

本校は大正9年、山下亀三郎氏により第二山下実科高等女学校として創設され、地域の皆様に温かく見守られながら地域に根差した教育活動を行ってまいりましたが、今年度末をもってその長い歴史の幕を閉じることになりました。

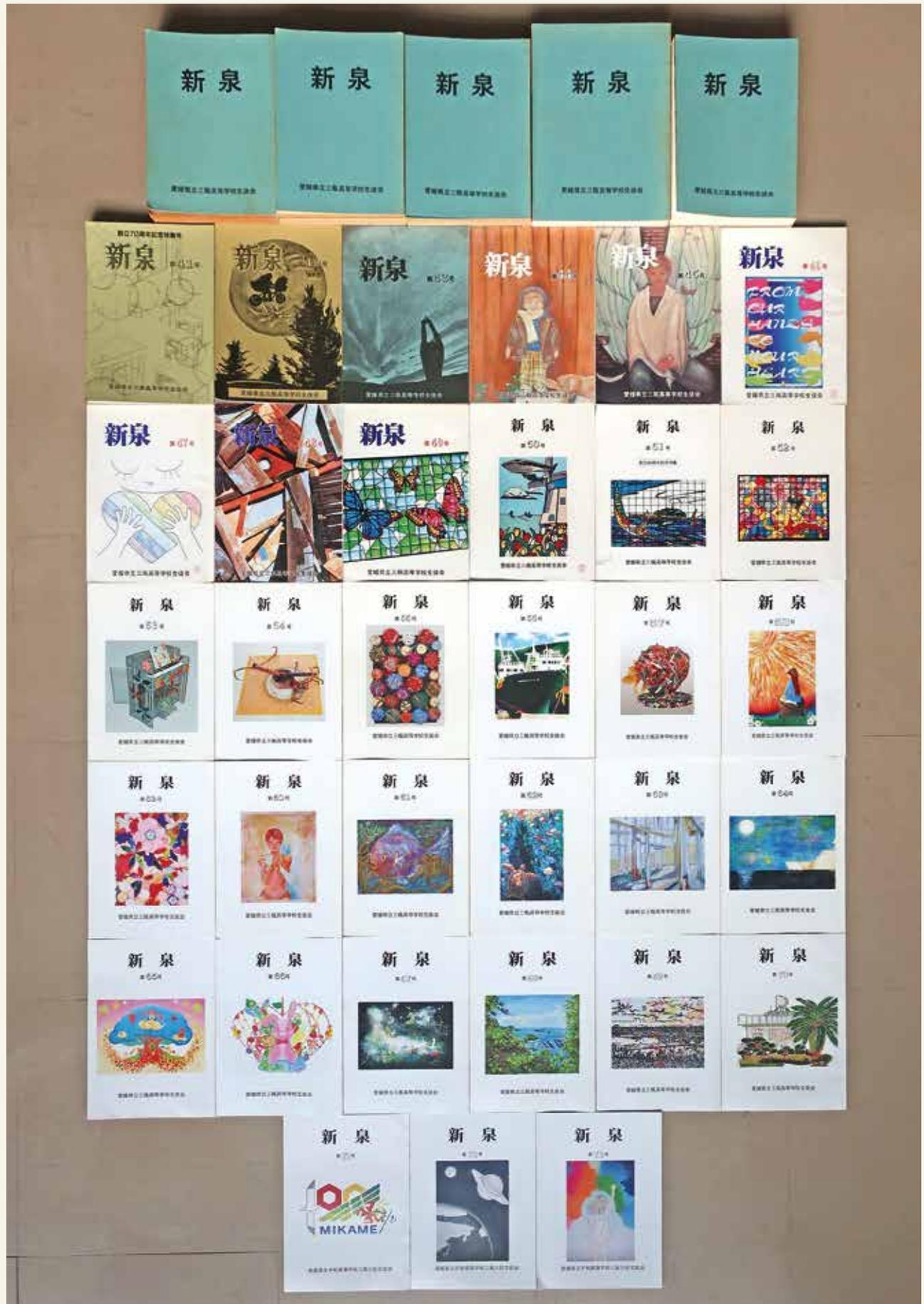
私は令和5年度に分校長としてこの学校に赴任いたしました。新任式で初めて2、3年生30名の生徒たちと顔を合わせた時の、全員がきちんと姿勢を正して人の話を真剣に聴く態度や、校内での笑顔で元気のよい挨拶等、大変素直で生き生きとした生徒たちの姿に、心を打たれたことが今でも忘れられません。このような素晴らしい生徒たち全員に満足のいく学校生活を提供できるよう、少人数の良さを最大限に生かし、個に応じたきめ細かな学習指導や進路指導はもちろん、本校の特色である地域と協働した「総合的な探究の時間」(コギトタイム)を通した防災学習・探究活動やボランティア活動、「サバイバルウォーク」や「マ

リンスポーツクラスマッチ」等の学校行事の充実、宇和高等学校との連携による部活動や体育祭の実施等、三瓶分校でしか味わえない魅力あふれる教育活動の展開に、教職員一丸となって努めて参りました。最終年度、3年生のみ14名の生徒たちは、「Challenge ～14人だからできること 全員が輝く学校に～」をスローガンに、少人数という現状をプラスに変え、日々笑顔でひたむきに学校生活を送ってくれました。今後の人生において、これまで関わっていただいた多くの方々からの学びを生かし、三瓶スピリットである「思いやりの心、向上する心、健やかな心」の精神のもと、何事にも向上心をもって挑戦し、活躍してくれることを信じています。

最後になりましたが、これまで長きにわたり御支援いただきました。卒業生・地域の皆様を始め、すべての皆様方に心から感謝申し上げ、閉校の御挨拶といたします。



# 新泉の軌跡



# 記念行事

## サバイバルウォーク

令和6年5月9日(木)



## 記念試合

6月9日(日)・28日(金)両日ともに雨天のため中止  
宇和球場屋内練習場で記念セレモニーを実施



# 記念講演

令和6年6月10日(月)



宇和高等学校三瓶分校  
2024. 6. 10  
耐久で勝つ  
明徳高等学校野球部  
監督 馬淵史郎



馬淵監督様  
三瓶分校へ  
ようこそ!!



# 記念文化祭

令和6年11月3日(日)



# 記念体育祭

令和6年9月7日(土)





# 歴代校長一覧



初代  
長井音次郎



第2代  
大谷 義松



第3・4代  
佐伯 秀雄



第5代  
曾我部熊五郎



第6代  
横田 章臣



第7代  
三好 清明



第8代  
池川 安



第9代  
末平 芳美



第10代  
大塚 国利



第11代  
門多 寿道



第12代  
井伊 信博



第13代  
砂田 肆朗

## 創設者紹介



### 創設者 山下亀三郎

山下亀三郎、生母出身地の関係にて本校の創設を發起する。

#### 〈創設の趣旨〉

山下亀三郎氏は、事業家として多大なる成功を取めた。それは慈母の訓育の賜であるとして女子教育の大切さを深く感じ、大正6年5月、氏の郷里吉田町に山下実科高等女学校を設立した。ついで、慈母の生地たる当三瓶町に第二校として本校を設立したのである。

#### ～山下亀三郎氏略歴～（創立60周年記念誌より）

- 一、慶応3年4月9日、北宇和郡吉田町（喜佐方村）大字河内の庄屋の末っ子として生まれる。父源治郎、母敬子
- 一、明治15年、15才の時、郷里を出奔
- 一、明治44年、山下汽船合名会社を創設。（後山下汽船株式会社）
- 一、大正15年8月、フランス政府より「グラン・トフィシェ・ド・ロドル・ロワイヤール・デュ・カンボージュ」勲章を授けられる
- 一、昭和18年、内閣顧問に任ぜられる
- 一、同年9月、天皇の御前において御進講
- 一、同19年12月13日（77才）大磯の別邸にて死去。勲一等瑞宝章を授けられる  
法号「大用院殿義海超僊大居士」



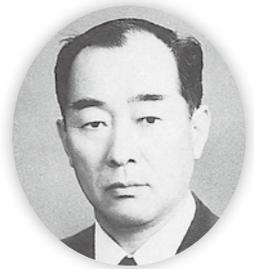
母 敬子（校母）



第14代  
河野 頼雄



第15代  
宝来 久道



第16代  
矢野 守



第17代  
三好 甫明



第18代  
井上 誠



第19代  
藤原 正継



第20代  
青木 忠一



第21代  
青木 憲一



第22代  
仲田 正夫



第23代  
西本 修文



第24代  
片山 茂



第25代  
佐々木靖夫



第26代  
中村 光宏



第27代  
河野 昇治



第28代  
星川 志朗



第29代  
山下 博司



第30代  
山下 尚位

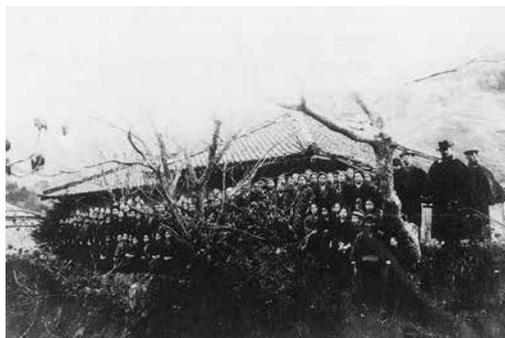


第31代  
児島万代光

## 沿革の概要

### 第二山下実科高等女学校

- 大正 8. 4. 山下亀三郎生母出身地のゆかりで第二山下実科高等女学校創立発起  
8. 12. 第二山下実科高等女学校設立申請  
9. 2. 25 財団法人設立申請  
9. 3. 7 第二山下実科高等女学校設置認可申請  
9. 4. 18 入学式挙行 第1・2学年生 計77名  
校母祭（開校記念日）  
9. 5. 20 第二山下実科高等女学校 財団法人設立及び学校設置開校認可  
10. 6. 本館 木造2階建 1,294.44㎡新築  
10. 9. 25 開校式挙行  
13. 3. 7 組織変更第二山下高等女学校認可



### 第二山下高等女学校・併設山下西南中学校

- 昭和 18. 2. 16 生徒定員400名に変更認可  
19. 12. 13 理事長山下亀三郎死亡、嗣子山下太郎就任  
20. 3. 校地拡張及び校舎木造2階建 936.52㎡新築  
21. 3. 理事長山下太郎辞任、木村長吾就任  
22. 4. 1 新制男女共学山下西南中学校を併設  
23. 4. 1 新制男女共学山下西南高等学校となる  
23. 4. 27 県立移管



### 愛媛県立三瓶高等学校

- 昭和 23. 5. 25 4月1日にさかのぼり愛媛県立三瓶高等学校となる  
24. 9. 1 愛媛県立三瓶高等学校開校  
24. 10. 7 講堂木造平屋建 396.79㎡新築  
24. 10. 10 創立30周年式典挙行  
25. 4. 1 定時制（普通科）開設  
27. 5. 校舎増築 運動場拡張  
29. 3. 校門開設 温室設置 自転車置場設置  
30. 12. 校長公舎新築及び職員公舎2戸校外へ移転  
31. 6. 学校図書館木造2階建 330.64㎡新築  
31. 10. 校歌制定  
32. 4. 生徒定員全日制450名 定時制200名  
36. 6. 15 本館木造2階建 667.76㎡及び用務員室並びに職員便所木造平家建 62.87㎡新築  
36. 10. 4 創立40周年記念式典挙行  
38. 4. 1 生徒定員 全日制565名 定時制180名  
39. 4. 1 生徒定員 全日制680名 定時制170名  
39. 4. 5 女子制服改定 男子便所撤去  
39. 5. 31 生徒用便所 木造平家建 60.89㎡新築  
39. 7. 職員浴室・工作室 木造平家建 14.64㎡新築  
40. 4. 1 生徒定員 全日制750名 定時制160名  
42. 4. 1 生徒定員 全日制740名 定時制160名  
42. 7. 1 運動場拡張工事完成 4,473㎡  
43. 3. 31 第2教棟移転  
43. 4. 1 生徒定員 全日制720名 定時制160名



- 44. 1. 29 特別教棟新築落成 本館移転
- 44. 3. 31 図書館及び校舎移転
- 44. 4. 1 生徒定員 全日制 650 名 定時制 160 名
- 44. 7. 7 旧校舎撤去
- 44. 9. 11 大運動場完成 13,200㎡
- 45. 3. 31 講堂移転 格技場に用途変更
- 45. 4. 1 生徒定員 全日制 590 名 定時制 160 名
- 45. 7. 13 通学用道路橋竣工「山下橋」と命名
- 45. 10. 31 体育館新築
- 45. 11. 21 創立 50 周年記念及び整備事業 5 年計画完成記念式典挙行
- 46. 4. 1 生徒定員 全日制 540 名 定時制 160 名
- 47. 7. 23 体育館に音楽室、同準備室増築
- 52. 7. 31 普通教棟撤去  
第 1 期工事、本館鉄筋 4 階建、延 1,059.00㎡完成
- 53. 7. 25 木造 2 階建図書館・木造本館など危険校舎改築により取壊し
- 53. 12. 14 体育館 1 階に美術室、同準備室、普通教室、定時制職員室、保健室増築
- 54. 2. 22 第 2 期工事 本館鉄筋 4 階建、延 1,111.12㎡ 渡り廊下鉄筋 3 階建 198㎡完成
- 54. 4. 10 創立 60 周年記念事業として山下記念館、山下亀三郎氏胸像、コギトの泉復元及び記念庭園の完成
- 54. 6. 15 同上建物寄付受入
- 55. 3. 27 格技場 鉄骨造 2 階建（1 階部分 自転車置場）完成
- 55. 4. 19 講堂（格技場に用途変更）を卓球場に用途変更
- 55. 11. 2 創立 60 周年及び整備事業計画完成記念式典挙行
- 61. 3. 31 定時制課程閉校
- 63. 3. 31 体育器具収納庫完成
- 63. 6. 24 防球ネット設置
- 平成 1. 4. 1 スクールカラー制定
- 2. 4. 1 女子制服改定（学年移行）
- 2. 11. 14 創立 70 周年記念式典挙行
- 5. 4. 1 生徒定員 全日制 1 学年 135 名
- 8. 4. 1 生徒定員 全日制 1 学年 80 名
- 8. 10. 31 運動場西側に庭園（コギトの杜）完成
- 10. 4. 1 生徒定員 全日制 240 名
- 12. 9. 25 創立 80 周年記念事業（通用門、コギトの道）完成
- 12. 11. 4 創立 80 周年記念式典挙行
- 14. 2. 12 防球ネット設置（体育館側）
- 14. 10. 31 特別教棟耐震・改修工事完成
- 15. 9. 16 防球ネット設置（ライト側）
- 15. 10. 31 体育館大規模改修工事完成
- 16. 10. 20 防球ネット設置（レフト側）
- 17. 8. 31 商業教室エアコン設置
- 18. 1. 31 本館高架水槽改修
- 18. 12. 27 防球ネット設置（レフト～センター側）
- 22. 4. 1 生徒定員 全日制 1 学年 60 名

- 22. 11. 6 創立 90 周年記念式挙行
- 25. 4. 1 体育館耐震改修工事完了
- 25. 11. 25 「社会貢献青少年」内閣府特命担当大臣表彰
- 27. 3. 26 本館、普通科教棟、武道場耐震改修工事完了

## 愛媛県立宇和高等学校三瓶分校

- 令和 2. 4. 1 分校化に伴い、愛媛県立宇和高等学校三瓶分校に校名変更
- 2. 10. 22 創立 100 周年記念愛媛県音楽教員演奏会
- 2. 11. 7 創立 100 周年記念式挙行  
創立 100 周年記念講演会
- 4. 3. 17 山下記念館の各施設を本館、特別教棟へ移動
- 5. 4. 1 生徒募集停止
- 6. 6. 10 閉校記念講演会
- 6. 6. 28 閉校記念招待試合
- 7. 2. 21 閉校記念碑完成
- 7. 3. 1 閉校式挙行



# 創立100周年からの足跡をたどる

(令和2年-6年)

## 令和2年▶▶▶

- 4. 1 愛媛県立宇和高等学校三瓶分校に校名変更
  - 7. 1 公営塾「C-LAB」オープン
  - 9. 5 初めての本校・分校合同体育祭
  - 10.22 創立100周年記念愛媛県音楽教員演奏会
  - 11. 7 創立100周年記念式・記念講演会
- 愛媛県歯科医師会「はぴかちゃん歯いく(俳句)大賞」  
団体賞 宇和高校三瓶分校



100周年空撮



対面式



記念文化祭



記念講演会



遠隔授業



合同学習会



公営塾オープン



記念サバイバルウォーク



記念演奏会



記念Tシャツ

## 令和3年▶▶▶

- 5.25 一人1台端末配布スタート
- 7. 8 初めてのマリンスポーツ（クラスマッチ）
- 12.20 三瓶分校中庭イルミネーション誕生

- 第3回ダルメイン世界マーマレードアワード日本大会アマチュアの部  
銅賞 宇和高校三瓶分校家庭クラブ
- 愛媛県歯科医師会「はぴかちゃん歯いく（俳句）大賞」  
団体賞 宇和高校三瓶分校



いかだ集会



1人1台端末配布



公営塾（C-LAB）



シトラスリボン講習会



演劇鑑賞会



カンナフラワー制作



マリンスポーツ



マラソン大会



クリスマスコンサート



中庭イルミネーションオープニングイベント

## 令和4年▶▶▶

- 4. 8 最後の入学式
- 3. 3 初めての本校・分校合同クラスマッチ

- 第4回ダルメイン世界マーマレードアワード日本大会アマチュアの部  
銀賞 石田拓海・山本辰志  
銅賞 山下太輝・菊池遙翔
- 令和4年度愛媛県高等学校総合文化祭  
テーマ  
優秀 宇都宮吏聖
- 愛媛県歯科医師会「はぴかちゃん歯いく  
(俳句) 大賞」  
団体賞 宇和高校三瓶分校



2年修学旅行



体育祭結団式



最後の入学式



合同クラスマッチ



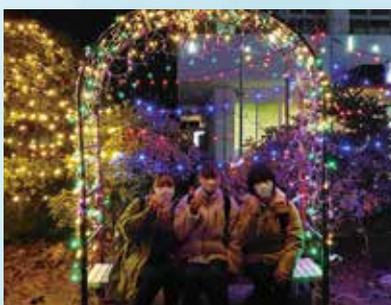
3年修学旅行



谷道川清掃



防災デイズ



奥地の冬のイルミネーション



サイクリングデイ



卒業生を送る会

## 令和5年▶▶▶

- 第5回ダルメイン世界マーマレードアワード日本大会アマチュアの部  
銀賞 井上望愛・宮中七海  
銅賞 紀伊野来和・窪田紗羅梨・曾我唯奈・竹内健人・今西純楓・大星舞華・田中杏星・仲川漣
- 高校生ご当地グルメ甲子園～in 西予～  
あんたらが大賞やけん賞、ゆるりあん賞、西予PR賞  
コギトタイム商品開発班  
(宇都宮沙那・西川千尋・仲川漣・紀伊野来和・曾我唯奈)
- BizフェスEHIME2023 高校生部門  
奨励賞 濱田大誠
- FM愛媛カモ☆れでい★Night! 学校CMコンテスト  
大賞 コギトタイム学校広報班  
(大星舞華・菊池沙雪・清家綾香・松井菜々恵・窪田紗羅梨)
- 令和5年度人権尊重の意識を高めるためのポスター  
入選 井上望愛



サバイバルウォーク



3年生遠足



クラスマッチ モルック



奥地の海のか～にばる



そうめん流し



救急法講習会



学校CMコンテスト大賞



体育祭



文化祭



高校生ご当地グルメ甲子園

## 令和6年▶▶▶

- 6.10 閉校記念講演会
  - 6.28 閉校記念招待試合(野球)雨天のためセレモニーのみ実施
  - 3. 1 最後の卒業式、閉校式
- 第6回ダルメインWorldマーメイド  
アワード in Japan  
銀賞 宇都宮吏聖  
銅賞 曾我唯奈・吉見太佑



県総体壮行会



始業式



中間考査



身体計測



校母祭



非行防止教室



スポーツテスト



野球部とエール交換



避難訓練



休日子どもクラブ



演劇鑑賞会



いかだ集会



生徒会スローガン



5月の大雨



県総体開会式



人権・同和教育講演会



三瓶町民大運動会



鯛そうめん



奥地の海のか〜にばる



夏の選手権大会



救急法講習会



野球応援

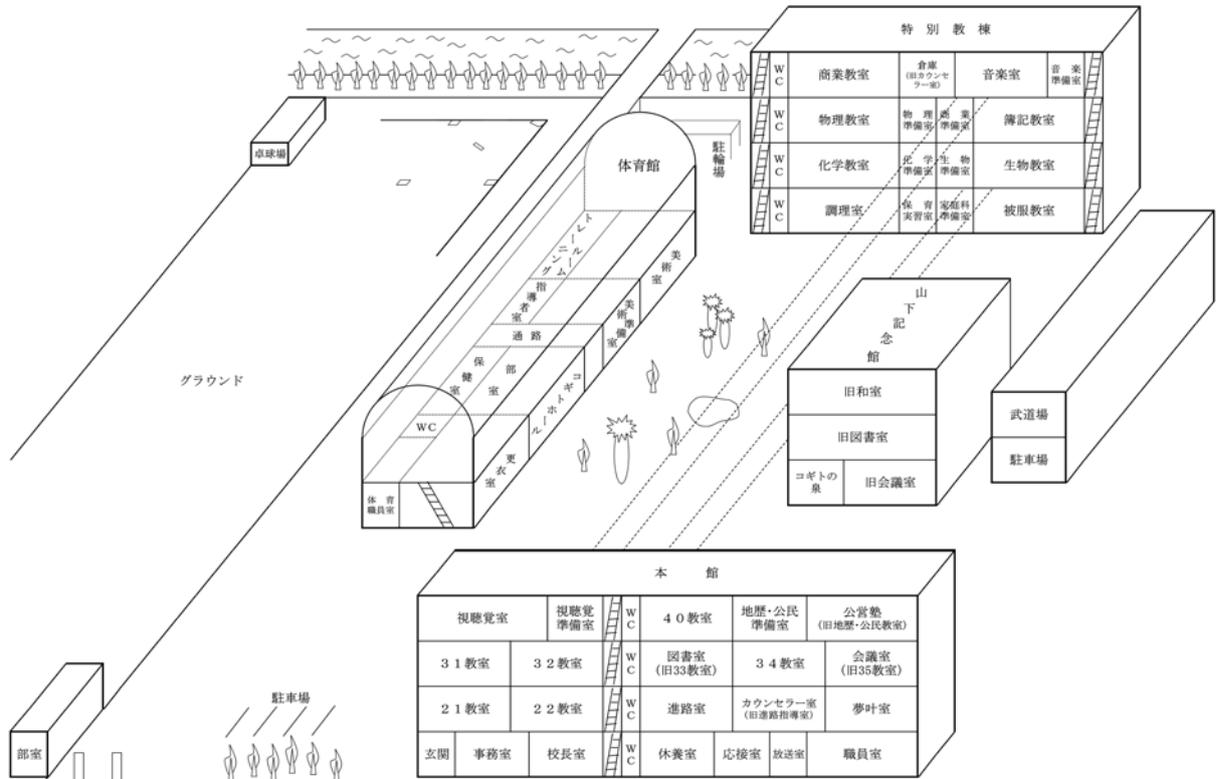
## 在校生

### 母校と仲間への思い



- 閉校しても、俺たちの青春は永遠に閉校中！  
阿部 晃佑
- 三瓶分校が閉校。非常に残念なことです。  
井伊 健太
- たくさん成長できた3年間でした！ありがとうございます三瓶分校！！  
井上 望愛
- 生徒会長として最後を飾らせてもらいありがとうございます。見かけたら声をかけてほしいです。  
宇都宮吏聖
- 一緒にここに在り続けてくれてありがとうございます  
紀伊野来和
- 閉校するのは悲しいですが、この学校はいつでも心の中にいます。  
菊池 唯希
- 三瓶分校、三年間ありがとうございます！  
窪田紗羅梨
- あっという間だった3年間 たくさんの楽しい思い出ありがとうございます  
曾我 唯奈
- 三瓶分校でよかった！！  
竹内 健人
- 今まで3年間ありがとうございます！！  
みなな自分のやりたいことやり切ろうぜっ！  
濱田 大誠
- 3年間ありがとう  
前川 蒼空
- 惜しむれど 過ぎ去る時は 諸行無常  
宮弓 優斗
- 三瓶分校そしてクラスのみんなありがとう。  
三好 乙葉
- この最後のバトンどこに置いといたらいいですか？  
吉見 太佑

# 校舎配置図





## 惜別 感謝 そして夢

旧教職員

倉田 茂

平成7年4月1日…三瓶高校に赴任が決まり、部活動の顧問は陸上競技部だということを聞いた私は、その足で練習を見にいった。しかし、グラウンドには、部員の姿はおろかスタートラインもトラックもなく、閑散としていた。

三瓶高校は、昭和40年頃の高度経済成長期には、定時制を合わせると全校生徒910人もの生徒が在籍する中規模校であった。しかし、私が赴任した時、町は過疎化の進む地域となっていて、人口は半減し、三瓶高校の全校生徒数も236人と全盛期の1/3以下となっていた。地域には結束力や教育力があり、生徒は真面目で素直で純朴だったが、自主性、主体性、積極性に乏しく、「何もないのが幸せ」という生徒が多かった。元来はスポーツの盛んな地域であったが、生徒のスポーツに対する意識は低かった。

しかし、佐々木りつ子、山下育代、中野将春、池本幸代などの全国大会での活躍で、生徒たちは意識を変えていき、「努力することが素晴らしい」とまでは思えなくても、「努力しなければならない」と思うようになっていった。それが、次第に生徒会活動に現れ、学校行事を変え、学校を変え、生活を変えていった。

月日は夢のように流れ、赴任してから11年が過ぎた。平成18年3月、夢を描き赴任した「三瓶高校」はやっぱり私が思っていた、私が期待していた「三瓶高校」だった。陸上競技部の生徒たちは、何となく本校に入学した生徒であったが、入部という「きっかけ」と努力できる「チャンス」で全国に羽ばたく選手になってくれた。もし「陸上競技との出会い」と「努力の価値」を知ることがなかったら…自信も誇りもなく、不安の中で今後の人生を過ごしたかもしれない。

赴任したころは、四国大会以上の大会での通告（アナウンス）で「みかめこうこう」と呼ばれることはなかった。しかし今では、日本陸上競技選手権大会でも間違いなく三瓶高校は「みかめこうこう」である。

努力によって、夢が目的となり、そして目標になり、多くが現実のものとなった。

「努力だけで日本一にはなれないが、努力しないとそのステージにも上がれない」

そのことを証明してくれた多くの生徒たちに感謝している。

平成14年、水沼教諭デザインの「三瓶高校Tシャツ」を作成し、販売した。平成14年から17年までの4年間で生徒数以上の1,093枚を販売し、生徒は多くの場面で着用するようになった。誇りを持てる三瓶高校になった瞬間である。

『努力には夢があった』

そのことを証明してくれた三瓶高校が閉校してしまうのは、時の流れとはいえ、惜別の情に堪えない。しかし、あの時の三瓶高校の輝きは、決して色あせることなく、私たちの心の中に今もある。

今回、このような拙稿を発表する機会をいただいた関係者の皆様、そして三瓶高校に携わっていただいたすべての皆様に感謝を申し上げます。夢をありがとうございました。



## 真民先生と三瓶高校

旧教職員

藤原 俊邦

私は、「三瓶高校」としての最後の3年間勤務しました。在職中、生徒・保護者、地域の方々、先生方に恵まれ、とても充実した時間を過ごしました。職員室入口には、「三瓶のこどもたちのために」というプレートがあって、その言葉を胸に教員として生徒や先生と向き合う毎日でした。

在職中の3年間で、坂村真民先生に関する思い出がたくさんあります。なかでも印象深い思い出は、創立100周年前年に記念講演の講師を坂村真民記念館館長の西澤孝一先生に「是非お願いします」と記念館までお願いに上がった時のことです。西澤先生ご自身が記念館を案内され、真民先生に纏わるたくさんのエピソードを熱く語っていただきました。そしてその後、「光栄なこと」と、講師を御快諾いただきました。

翌年の記念講演会当日、先生が同伴された真民先生の三女真美子夫人にもお会いでき、西澤先生と真美子さんのお話を聴きました。西澤先生は義父である真民先生の事を、静かな語り口ながらも情熱を持ってお話いただきました。また、真美子夫人から、御自身が生まれた三瓶の風土や人情と当時の三瓶高生に対して賛辞をいただき、とてもうれしく思いました。「念ずれば花ひらく」をはじめ多くの作品で世の人を魅了する詩人であり、三瓶高校にとって大切な恩師であった真民先生の言葉はひとつひとつ胸に刺さります。先生は創立40周年記念講演の中で、三瓶を「詩の原点」「第二のふるさと」とされ、「もし私が違う処にきていたら、今日の自分にはなっていなかったと思う。詩など作らぬ人間になってしまっていたかも知れない。しかし三瓶は、その名のとおり、わたしに再び歌を作らせ、詩をつくらせてくれた。学校の先生たちも、土地の人たちも、皆よい人であった」と、自らの人生で苦しかった時期の思いを感謝の気持ちで語られたそうです。真民先生が愛した風土と人情は今も変わりません。また、三瓶高校・分校の輝かしい歴史、「思いやりの心」「向上する心」「健やかな心」の精神、真民先生の校歌は、いつまでも人々の心の中に残り続けると信じます。そして、ここで生まれ育ち、または、ここに移り住む「三瓶のこどもたち」に三瓶の未来を託したいと思っています。



## 思い出の学び舎

旧PTA会長

山本 裕一

閉校記念誌への執筆の機会を頂きましたこと、心より感謝申し上げます。

早いもので三瓶高校を卒業して40数年余りの歳月が経っています。当時は1学年4クラス、3学年で500名以上の生徒がおり活気に満ち溢れた高校生活を過ごすことが出来ました。部活動で汗を流した日々、クラスマッチ、体育祭、修学旅行、高校野球夏の大会の応援、予餞会でギターを弾きながら歌った思い出、卒業アルバムを見返し、先生・同級生の顔を見ながら当時を思い返し大変懐かしく思えました。また、血気盛んな年頃であり支えて頂いた先生方には大変感謝を致しております。私も今年60歳を迎えるにあたり、気持ち自体は変わっていないつもりですが、寄る年波を思いますと、月日の大切さと流れと言うものを感じております。

また、私自身の自宅が高校に近いこともあり、幼い頃には先生や学校のお兄ちゃんやお姉ちゃんに遊んでもらい、卒業後におきましては我が子のPTA活動に参加をさせてもらったり、長きに渡り大変お世話になった次第です。

閉校にあたり、地域の皆様はもとより、歴代の校長先生をはじめ多くの関係者の皆様、大変ありがとうございました。寂しい思いはありますが、校歌にある「いまもなほ、そびゆる学び舎よき人とならむ」「栄えゆく美しき三瓶、その名ひびかせむ」三瓶の名前は今年度までとなりますが、学び舎での思い出はこれからも私達の心の中にあり続けると思います。

結びに、皆様方が今まで築いてこられた伝統と校風は、卒業生をはじめ、保護者地域の方々の誇りとして、心に深く刻まれ、新しい高校に受け継がれるものと思えます。当地域の益々の御発展を祈念申し上げ、閉校に寄せる思いと致します。



## 三瓶高校の思い出

卒業生（昭和42年度卒）

竹崎 幸仁

昭和40年の入学時、正門は金毘羅橋を渡って少し下った左手にあった。敷地内に入ると左手にテニスコートと体育館を兼ねた講堂、右手に図書館、少し歩いた正面に、当時としてはモダンな造りの本館があった。玄関、校長室、職員室等があり、それぞれに思い出があるのだが、特に強く印象に残っているのは校長室だった。

学級担任から、「君たちの修学旅行は中止だ」との報告を突然通告され、その理由を尋ねたが、苦渋の表情で沈黙されたままだった。業を煮やした我々数人の代表は、最終的に校長室を訪問し、その理由を聞いた。だが、説明に納得できない我々は、「これは、私達の過失にあらず。よって、中止の理由とはならない」と強く抗議した。かなり揉めたいが、最終的に修学旅行は実施された。今も先生方のご英断と、既に黄泉の国へと旅立った二人の友には、心から感謝している。

「コギトの泉」は木造の二つの校舎の間を流れており、その冷たさと隣接する茶室で頂戴した初めての抹茶も、貴重な思い出として残っている。命名者は「坂村真民」先生だ。校歌の作詞も同様で、全国的には「中田喜直」先生が有名だが、私はこの校歌と歌詞が大好きだった。式典に招かれたとき、今でも毎回、先生や生徒の皆さんと共に歌っていたのだが、来年度からは歌えなくなる。とても淋しい。

三瓶町の人口は、2万人超の時期もあったが、ついに6千人を切った。少子高齢化の進んでいる三瓶町の将来は大変厳しく、「山下亀三郎」氏の母への追慕と女子教育の重要性から創立された我等の高校も、今年度を最期として閉校となる。極めて残念だが、残せた記念碑と対面し、個々の思い出を語り合って、往時を偲んで欲しい。



## 在学中の思い出

卒業生（令和元年度卒）  
清家 康太

私が三瓶高校在学中に最も思い出に残っていることと言えばやはり部活動で、その中でも高校3年の総体で400mハードルでインターハイに出場できたことが、私の1番の思い出です。

私は高校2年の夏頃まで100mで成績を残そうと日々練習していました。しかし、大会で思うように自分の走りができず、タイムも横ばいで、落ち込むことが多々ありました。その時、当時の顧問の毛利先生に、400mハードルをやってみないかと、提案していただきました。しかし、即決することができませんでした。なぜなら、400mハードルは100mに比べてマイナーな競技であり、100mは陸上競技において最も華のある種目だと私は思っていたからです。100mでどれだけ大きな大会に出られるか、どれだけベストタイムを伸ばせるかが私の中の部活動での目標だったからです。1人で考えても埒が開かないので、それを父親に相談すると、「人の裏に道あり、花の山」という言葉が返ってきました。言葉を変えれば天邪鬼のようなもので、株式などでよく聞く格言です。私はその言葉を信じて400mハードルをやる決意をしました。冬季練習は今までの練習とは全く異なる練習メニューで、400mの走り方もハードルの跳び方もわからない状態でスタートしたため、それを主として練習してきた選手とは雲泥の差でした。最後の総体に間に合わせるために頭を使いながら人一倍練習し、出る試合全てでベストを出せるよう努力をしてきました。大きな決断と大きな努力によって、県総体で2位、四国総体で6位という成績を収めてインターハイに出場できたからこそ、私の在学中最も印象深い思い出になったのだと思います。

最後に、母校が閉校してしまうのは寂しいですが、私は三瓶高校で出会えた先生方、友達、三瓶高校で作った思い出は決して忘れません。そして、三瓶高校を卒業できたことを私は誇りに思っています。ありがとう三瓶高校。



## 在校当時を振り返って

卒業生（令和2年度卒）  
三浦 梨紗

母校である宇和高等学校三瓶分校が閉校を迎えるというお知らせを受け、卒業アルバムを見返しました。

私にとって三瓶分校で学んだ日々はかけがえのないもので、小規模校であったからこそ、三瓶分校で過ごせたからこそ得られたものが多くあります。昔から人前に立つことや自分の考えを公の場で話すことが苦手な私が、このような機会をいただき、2020年度卒業生を代表させていただいていることもその内の一つです。

3年間の思い出とって一番に思い出されるのはやはり集団行動です。最初は意見の相違から足並みが揃わず、苛立ち、言い合いになったこともありました。が、「なぜ」ではなく「どうしたら」より良くなるのか話し合い、時に迷いながら、合格という一つの目標に向けて練習を続けました。その結果、個ではなく集団としての意識が芽生え、その力が様々な行事や学校生活の中で生きていたように思います。特に体育祭では、練習中に衝突することも多くありましたが、本番ではメリハリを付け、どのような結果であれ最後は笑顔で終わることができ、個人的にはとても記憶に残るものになりました。卒業した今振り返ると、目に見える大きな変化はなくとも、一人一人が集団行動を通して得られたものは多くあったのではないかなと思います。

閉校にあたって、母校である三瓶分校から学生の活気ある声が聞こえなくなってしまうのはとても残念なことではありますが、昔話に花を咲かせた時、きっと様々な出来事と共に、卒業生一人一人が三瓶分校で過ごした日々を思い出すことだろうと思います。それほどまでに三瓶分校で過ごした3年間は私にとってとても意味深いものでした。

そして、105年という歴史に幕を閉じた後でも、三瓶スピリットである「思いやりの心」「向上する心」「健やかな心」この三つの精神を大事に持ち続けていきたいと思っています。



## たくさんのありがとう

卒業生（令和3年度卒）

宇都宮 美凧

全校生徒50人にも満たない小規模校で、私はあれをやってあげよかったという後悔は一つもないくらいの挑戦をし、「自分」を強くもって努力することの大切さを学ぶことができた。英語英文学を専攻している今も、その時の熱量を忘れずに勉学に励むことができています。高校時代、私は5教科全てマンツーマン授業をしてもらっていた。先生と二人で過ごす時間が大好きだった。教壇の真ん前から見上げる先生の姿や、二人で囲む冬のストーブの暖かさを今でも鮮明に覚えている。授業だけではなく、恋の話をしたり部活や進路の相談に乗っていただいたりした。他校と違い大学受験生が少ない環境は毎日が孤独との戦いだったが、先生との時間は心の拠り所だった。温かな愛を持って寄り添ってくださった先生には感謝の気持ちでいっぱい。さらに野球部で過ごした時間も私のかけがえない宝物だ。小学校からの友達が変わらぬ愛称で呼んでくれたこと、手作りお守りを大事にしてくれたこと、練習終わりに洗い物を手伝ってくれたこと、一緒に運ぶノックボール、部活終わりに自転車を走らせたコンビニまでの道、たくさんの思い出がある。また三瓶分校だけではチームを組めなかったため、多くの高校と合同チームを組んだ。新しい仲間が増え切磋琢磨した毎日は刺激的で楽しかった。同じチームなのにバラバラの公式ユニフォームを着て並ぶ整列は新鮮だったが、合同チームにしか出せない力を感じ心強く誇らしく思えた。日々深まるチーム力や絆が嬉しかった。普段気付いてないだけで、誰かとの時間が自分の心の支えになっていたり、かけがえないものであったりする。何気ない日常は、本当は当たり前ではなく幸せな日々だったのだと感謝の気持ちでいっぱい。温かいご指導をしてくださった先生方、励まし勇気づけ支えてくださった全ての方、最後まで一緒に戦ってきた仲間達に心からの感謝を伝えたい。そしてたくさんの思い出をありがとう。



## ありがとう三瓶分校

卒業生（令和4年度卒）

梶原 夢陽

三瓶分校は私を変えてくれました。私が入学した時から三瓶高校は分校となり、また、同級生は6人だけでした。「6」という数は私にとって貴重な数字です。今でも話し始めたら止まらなくなるくらい高校生活はとても濃いものでした。私は入試の時から女子1人で不安がとて大きかったのですが、クラスメイトや先輩後輩、先生方の協力もあり、3年間過ごすことができました。

生徒会副会長や学級委員長、6人しかいないから掛け持ちは当たり前。1年生の頃は自分に掛け持ちなんてできないと思っていましたが、何とかなるものです。高校3年の体育祭ではブロック長を務め、少人数でありながら単独チームで挑み、総合優勝には届きませんでした。選手宣誓が終わった瞬間、応援合戦が終わった瞬間、リレーで1位でゴールした瞬間、達成感を味わえた瞬間、3学年揃って最後の体育祭は感動するものばかりでした。このように、私の高校生活は毎日が充実していました。

16人と14人の後輩が入学してくれたことで、先輩としてできることを見つけ、三瓶分校の伝統を伝え、私たちが卒業した後もその伝統を受け継ぎ、語り継いでくれています。今年度をもって三瓶分校が閉校になるのは卒業生の1人としてすごく寂しいです。高校在学時に存続のためにもっとできることはあったのかと思いますが、後悔してもきれいなものとなりました。私たちの学び舎がなくなるのは寂しいですが、今後とも三瓶分校で学んだ全てのことをこれからの人生に活かしていきたいです。

「ありがとう！三瓶分校！三瓶分校最高！」





## 私を成長させてくれた 三瓶分校

卒業生（令和5年度卒）

矢田 倅大

名古屋市の中学校から三瓶分校に入学した私は、入学したときは、慣れない地域での高校生活で、またクラスメイトは地元生まれの人ばかりということで、クラスメイトと仲良くなれるのか不安な面も多くあったが、みんなが話しかけてくれたおかげですぐに仲良くなることができた。先生方は私にとって生徒と先生という関係以上に、三瓶での私の親代わりとし受験の時も親身になって支えてくれた。また、公営塾のC-LABでは勉強をサポートしてくれるだけでなく、講師の方がよく相談相手にもなってくれて進路の相談や受験勉強、暮らしのことなど多くのことを助けてくれた。卒業できたことも大学に合格できたことも、クラスの友人や先生、C-LABの講師の方が私のことを支えてくれたおかげだ。

そんな私の三瓶分校での一番の思い出は体育祭だ。学年の垣根を越えて分校全体で一つとなって一生懸命に体育祭に向けて活動に取り組むことは、他の高校ではできない経験だったと思う。私は1、2年生のときは装飾班として絵の制作を行っていたが、みんなで協力して一つのものを作ることの達成感を感じることができた。3年生では応援班として活動した。初めての応援班で、わからないことばかりで最初は振り付けも動きも合わせられず嫌になったときもあったが、最後は全員で完成させることができた。やったことのないことでも諦めずにチャレンジすることが自身の成長につながると感じた。結果として賞を取ることはできなかったが、トラブルがありながらも最後は団結して完成させることができて三瓶分校の底力と生徒の仲の良さを発揮することができたと思う。

思い出のたくさん詰まった三瓶分校が閉校となってしまうことは悲しいが、分校での経験は他ではできないような貴重なもので、私を成長させてくれた。この経験を大学での学びやその先につなげていきたい。



## 高校の思い出

在校生

宇都宮 史聖

私の高校生活は部活動一色でした。

私は高校では野球から離れようと中学生の頃から決めていました。しかし、部活動決めの日、中学生の頃に一緒に野球をした先輩方から、人数が足りないから入ってくれと頼まれたので、断り切れずに入ったというのが正直なところでした。しかし、辞めようと思っていた野球は、やっぱり楽しくて、毎日の部活が楽しみになりました。宇和高校の野球部として活動していたので、宇和の知らない同級生、先輩方も多く不安もありました。でも、全員優しくて面白く、すぐに親しくなれました。

高校野球は、毎日遅くまで練習して、土日も休みはなく、精神力が鍛えられました。また、一球一球の重みを知り、何事も雑にはしてはいけないと感じ、日々の練習だけでなく、学校生活においても一生懸命取り組むようになりました。そのような積み重ねの中で「甲子園にいきたい」という思いが強くなりました。

私たちが最高学年となった時、初めは人数が足りず連合チームとして活動しました。なかなか合同練習も難しい状況でしたが、春の大会では県大会出場を成し遂げました。

そして3年生となり、新入生が11人も入ってくれたので、単独での新チームとして活動できるようになりました。

最後の夏の大会。チーム全体で打倒私学と甲子園出場を目標にしてこの夏の大会に向けて練習してきました。一回戦は帝京第五高校。九回裏サヨナラで勝利をつかみました。打倒私学を達成することができ、全員で喜びました。この勢いでと挑んだ二回戦の第1シード松山商業高校。最後まで諦めずに戦いましたが、相手の投手を崩せず、また、チームのエラーもあって0-6で敗退しました。

この3年間、しんどい思いや上手いかわないときもありましたが、三瓶分校と宇和高校の大好きな仲間と過ごせてとてもよかったです。また、3年間応援してくださいました学校や地域の方々、本当にありがとうございました。野球部員が一人にも関わらず、最後まで部活動に取り組めたのは、周囲の協力のおかげです。高校野球で学んだことや鍛えてきた精神力、忍耐力をこれからの生活に生かしていきたいです。

From a Sapporo High School  
100th  
Anniversary

## 記念講演

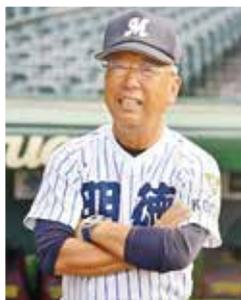
令和6年6月10日

演題 「諦めなければ

夢も叶う」

馬淵

史郎氏（昭和48年度卒業）



### 講演者プロフィール

昭和30年八幡浜市生まれ。三瓶高等学校に入学し、野球一筋の高校生活を送る。三瓶高等学校を卒業後は拓殖大学に進学し、4年間野球部に所属。大学卒業後、神戸市の阿部企業に入社し、野球部監督として、都市対抗野球大会ベスト8、社会人野球日本選手権大会準優勝に導く。昭和62年より明徳義塾高等学校に勤務し、平成2年に監督に就任。甲子園に春夏合わせて37回出場し、平成14年の夏の甲子園で全国優勝を果たす。また、令和4年に18歳以下の野球ワールドカップで高校日本代表チームの監督として初優勝に導くなど、国内はもちろん世界でも大いに活躍している。



私が三瓶高校を卒業してからちょうど50年です。この体育館は、私たちが入学する時に初めて使った体育館なんです。50年ぶりにこの体育館に来たんですが、これが閉校記念の講演になるというのも不思議だなと思って、今ステージの階段が上がってきました。

私たちの頃は、定員が学年180人全校540人で、500人以上の生徒がいたわけです。月曜日に朝礼をやっていましたが、グラウンドの半分くらいの人数がいた時期があるんです。今は14人と聞いて驚いているんですが、これも時代の流れかなと思っています。

三瓶高校は、山下亀三郎氏が、母が三瓶町出身ということでここに第二山下実科高等女学校を創立し、それを前身としてできたと聞いています。半年程前に横浜に行くことがあったんですが、横浜にある山下公園は、山下亀三郎氏が横浜市に寄付をしたことで山下氏の名前を残して山下公園という名前になったそうです。山下公園はよくテレビや映画に出てくると思いますが、山下亀三郎氏の名前が残っているというのは凄いなと思って、我々が卒業した三瓶高校と関係があるんだなと卒業生として誇りに思っています。

私の両親は二及の出身なんですが、親父が教員をしていて大島から三瓶に帰ってくる時に、私は三瓶東中学校に3年生から転校して、1年間だけ三瓶東中学校で野球部に入って頑張りました。当時の大島は、人口2,000人くらいで、もうやることといえば魚釣りやソフトボールしかなく、それに明け暮

れた少年時代でした。そして中学2年の時に、甲子園で松山商業と三沢高校の延長18回再試合になった決勝戦をテレビで見て、その時にもう男に生まれたのなら野球しかないと思って、それからはもう野球、野球、野球とずっと思っていました。松山商業の純白のユニフォームが土に汚れて、その中で全国優勝をしたことに強烈な衝撃を受けて、もう一生がそこで決まったような気持ちになりました。数年前に当時のエースピッチャーだった井上明さんとその話をしたんですが、あの頃は愛媛県のスポーツをしている者はみんなが高校野球をやろうという気持ちになったという話を聞きました。

三瓶高校に転校した当時、後援会長に和田清隆さんがおられて、熱心な方で、遠征も連れて行ってもらいました。後援会の方々にも随分お世話になったんですが、それくらい三瓶高校の野球部を支援してくださいました。練習試合を三瓶高校でやる時は、ネット裏はたいへんな人ばかりでした。当時は、夏の大会前には大学に行っている先輩がみんな帰ってきてノックの手伝いを随分していただきました。もう感謝ですよ。合宿もやっていますね。その和田清隆さんの自宅がかなり大きな家だった関係で、そこで寝泊まりして、炊き出しをして、OBも来て、本当に盛り上がり方が凄かったと思っています。

なんとか3年間やりきったんですが、ベスト8が最高でした。愛媛県でベスト8と言ったら、郡部の学校が胸



を張れる成績だったんですね。当時の監督は青年監督の平野治さんで、「俺についてこい」という方でした。部長は石崎文明先生で、お酒が大変好きな方で、気合が入っていました。先ほど久しぶりにお会いしましたが、全然シルエットが変わらないのでびっくりしました。

当時は、それくらい野球、野球、朝から晩まで野球で、和田清隆さんに広場で朝5時からキャッチボールの練習をするから出て来いと言われてましてね。毎朝のようにそこで朝5時から練習したのを覚えています。実は昨日ね、雨の中そこに行ってきました。その下に和田清隆さんのお墓があるものですから懐かしくて。その広場は当時は相当広く感じたんですよ。でも今行ってみたら、こんなに狭かったんだなと思って。そこでね、やりましたよ毎朝のように。遅れたら怒られてね。それもいい経験でした。

大学は拓殖大学に進学したんですが、東都リーグに所属しているんですが、そこは結構三瓶の先輩が皆さん活躍していましたね、だから「三瓶」を「サンペ」とか「サンベ」などと読む人はいませんでしたね。「みかめ」ときちんと呼んでくれました。当時の野球部でね、三瓶高校の野球部では草分け的存在ですが、今日ご臨席の片山満雄さんという方がおられてですね。その方は国士舘大学に行って、電電東京ですかね社会人野球でも活躍されたんですが、そういう先輩方が随分東都の大学で活躍していた関係で、「お前三

瓶か」と言われたことが何度もあります。それはやっぱり後援会長の和田清隆さんがいろいろ導いてくださったおかげじゃないかなと思っております。人との出会いは本当に大事なんだなとつくづく思っています。

大学時分はこれといった成績は残せなかったもので、野球はもうキリがついたと思って松山の一般企業に就職してしまうんですが、土・日の度に三瓶高校が松山に遠征に来たら手伝いに行ったりいろいろしていました。そんな縁もあって、平野治さんの後に監督をされていた田内逸明さんにも随分お世話になったんです。そして、神戸市の阿部企業というところが野球部を作ることになって、田内逸明さんが監督になるのでついてこないかということで呼ばれたんですが、本当の話はね、断ったんです、一回目は。今更神戸に行ってもどうするっていう気持ちもあって。でもまあ、「1・2年手伝ってくれ」ということで一緒に行ったんです。すると、行ったはいいんですが、田内逸明さんが1年目にくも膜下出血で亡くなられて。それで、私が最年長だったものですから、「会社に残って、監督やってくれんか」と言われて。もう田内逸明さんが亡くなられたからもう帰れるからええわと思ったんですが、行き掛かり上、1年か2年、形だけつけて自分だけ帰ろうかなと思って引き受けたんです。

その会社がね、面白い会社でしてね。行ってびっくりしたんですが、従業員は80人しかいないんです。他の

企業はもう2万人3万人いる会社ばかりで、80人しかいない会社が社会人野球を持って都市対抗を目指そうと馬鹿みたいな話をしているわけですよ。手持ちのグラウンドもないんですよ。練習は不動産会社が持っていた三瓶分校の体育館くらいのグラウンドでやれっていうわけです。勝てるわけがない。弱小チームで、選手も来ない。高校ではレギュラーだったけど大学では控えている選手ばかりですよ。でも、田内逸明さんの関係で愛媛県の間人がその当時7人入っていたんです。これがね、大きかったんですよ。大学では控えやっただけど高校の時はそこそこ鍛えられていたという人がいて。

部員も、1人辞め2人辞め残ったのが15人くらいかな。そのうちの半分が愛媛県人ですよ。「おい俺ら、なんかかっこつけんと愛媛帰れんな」、「日本選手権か都市対抗かスポニチ大会くらいはなんとか出てから辞めようぜ」と言って頑張ったんです。

今、朝日放送で『奇跡』という題名でその阿部企業を取り上げてドラマを作ろうという企画があるんです。従業員80人でグラウンドもないような会社が、都市対抗に出て、神戸代表になるのも大変なのに、日本選手権で準優勝したというのは本当の奇跡なんですよ。私の役は小栗旬に頼んでいるって言うから、小栗旬だったら許可してやると言っています。何年後かに『奇跡』という題名で朝日放送であるかもわかりません。

「くそつたれ、くそつたれ」、「1度はかっただけでもつけて愛媛に帰りたい」と思ってやっていると、監督4年目に不思議と勝てました。そのうちに、台湾から選手をとったらどうかという話があって、台湾の国慶杯という大会を見に行っただけです。その時に凄いのが1人いて、それがジャイアンツに入った呂明陽です。これは凄いと思って声をかけたんですが、彼はまだ台湾文化大学の2年生で卒業してから兵役が残っているからダメだと言われたんです。それで、そのチームのセンターの林（リン）とピッチャーの陽（ヤン）に声をかけたんです。陽（ヤン）は陽岱鋼の父の兄です。運動神経抜群ですごい選手で、その2人が来ることになったんです。

その2人が入って軸ができて、日本の選手たちも愛媛出身の選手たちが頑張ったんです。宇和島東、南宇和、松



山聖稜、帝京第五、今治南などの選手が来ていたんです。本当に野球は一生懸命やっていたら何があるかわかりません。あそこで諦めていたら自分の人生もなかったんでしょうね。「これでもか、これでもか」と思ってやって、皆が皆成功するとは限りませんが、努力しない人間には一生そういうチャンスは回ってこないですからね。

昭和61年の都市対抗予選のことで、都市対抗の予選の応援は凄くて、高校野球の比じゃないんです。仕事を休んで野球をやってるわけですから、もう必死です。負けたらボロカスに言われるんですよ。特にその阿部企業は、80人しかいない会社なのに20人が抜けて、これでおまえら野球ばかりやりやがってと。本当は野球ばかりやってないです。夜勤もやりながらやってるんですけど。そこで勝ったんですよ。それも第1代表になったのが大きかったです。当時の兵庫県は、8チームくらいあって、その中でまぐれみたいで第1代表です。その時のキャッチャーをしていたのは三瓶高校の先輩ですよ。前田勝司とって、三瓶高校ではセカンドをやっていたんですが、阿部企業に入って、キャッチャーがいなかったもんだから私がキャッチャーにさせられました。最初は嫌がっていましたが、かなり形になってきて、打順は4番を打っていましたからね、私が辞めた後も都市対抗に4・5回補強選手で行っています。この前電話がかかってきて、「定年になりました」と言うので、「お前も定年にな

る歳か」と言ったんですが、いいやつでした。

そして都市対抗に行って、これも笑い話ですが、1回戦で神奈川第1代表の三菱自動車川崎に当たったんです。神奈川は強いんですよ。当時、三菱同士の補強選手が呼ばれるパーティーがあったんですが、阿部企業からも2人が参加したんです。そこで、陽（ヤン）はアンダースローだから左バッターばかり並べてくるかもしれないから、「パーティーに行った時に、陽（ヤン）が先発やって嘘を言うとき」と2人に言わせました。それで、実際の試合では岡本透という高卒2年目の報徳学園から来た小さい左ピッチャーを先発させたら、なんと7回までノーヒットノーランです。相手は1番から9番まで左バッターだったんです。3対2で勝って、その次に東北のチームに勝って、その次に日本石油に負けたんですが、そういう試合を覚えています。

そして、もう土木の仕事しながら野球しても自分の将来どうなるかわからないし、もう31歳でいい歳だったので、「もう松山帰ります」と辞表を出したんですが、野球は秋の日本選手権のシーズンがその年の終わりだから、そこまでやれと言われてたんです。じゃあ負けたら終わりだと思ったら、秋でも勝った勝った、また勝った。ずっと勝って、予選から11連勝で、もう1つ勝ったら日本一です。「お前ら勝ったら日本一やぞ」と言っていたら、決勝で負けたんですが。

そして、それを契機に辞めて松山へ

帰り、1年近く先輩の会社で社長秘書の仕事をしていたときに明徳から誘いがありました。現在は塾長で当時の野球部長が吉田圭一先生で、松山に帰るのなら明徳のコーチに来んかということで、2年半ほどコーチをして、平成2年8月1日から監督をやったんです。今振り返ってみたら運がいいんですが、一生懸命やりましたよ。

学生の皆さんに言いたいのはね。柵からぼたもちという言葉があるでしょう。いきなり幸運が舞い降りてくるという風な使われ方をするんですが、私はそうじゃないと言ってるんですよ。柵からぼたもちはね、落ちてきた時に柵の1番近くにおれる者、手を挙げて柵の下に手を置いている者が拾えるんですよ。いつ落ちてくるかわからないからと言って、後ろの辺で腕組みして待っている者は一生ぼたもちを拾えませんよ。そのぼたもちがいつ落ちてくるかわからなくても、辛抱してぼたもちが落ちてきたら俺が1番先に取れるところにいる人間がぼたもちを拾えるわけですよ。私はうちの選手たちにもいつも言ってるんです。「ええか、今2番目でもええ。1番目がこけたら2番目が1番になれるから。3番目なら1番、2番が転んだら3番目が1番になれるじゃないか。3番目になったら2番目になる努力をせよ。2番目だったら1番目になる努力をせよ」と。でも、結構落ちてきてるかもわかりませんよ、ぼたもちはその辺から。私はみんなにそういう気持ちで頑張ってもらいたいんですよ。1番言いたいのは

このことなんです。諦めないでやっ  
ていけばいいこともあるというのは、そ  
ういうところなんです。いいことばか  
りもないかもしれませんが、常に前向  
きに頑張っただけでやったら悪いことばかり  
もないですよ。

野球を通じて本当にいろいろな経験  
をさせてもらいました。私が監督にな  
り始めはいろいろなことをしました。  
正月も休まなかった年もありますよ。  
三が日も生徒を帰さずにね。学校の食  
堂が休みなので、女房に飯作らせてや  
りましたよ。

そして、明徳の監督に就任して1年  
目も、本当に私はつくづく運がいいと  
思っています。就任したのが秋で秋は  
1回戦か2回戦で負けたんですけど。  
平成3年の夏が夏の大会の初めての指  
揮だったんですよ。その初戦が伊野商  
業との開幕ゲームでした。9回裏ツー  
アウトランナー無しで3点負けていま  
した。普通、野球はツーアウトラン  
ナー無しで3点負けていたらほぼ負け  
でしょう。それが監督としての夏の初  
戦ですから、ベンチで高校野球は厳し  
いなと思ながらやっていました。す  
ると、1番の杉山智男がポールギリギ  
リにホームランを打ったんです。でも、  
それでもまだツーアウトランナー  
無しで2点差でしょう。「ああ、ホ  
ムランもうちょっと先に打っときゃ  
な」とか思ったりもしていたら、次の  
松下良士がインコースの球をどん詰ま  
りです。そして、その次の3番上原栄  
導がフォアボールになって。次が4番  
の津川力で、大きい男でヤクルトスワ  
ローズにドラフト3位で入ったんです  
が、その津川力に打順が回ってきたん  
ですよ。すると、相手が伝令を出した  
ので、その間に津川力をベンチに呼  
んでね。あの頃はポカリスウェットを  
冷やして飲ますのが流行っていたん  
です。それで、私は普段そんなことを  
したことはないのに、「津川飲んでい  
け」って開けてやったんです。緊張  
していたのか、ゴクっとしか飲まな  
かったので、「最後だから全部飲んで  
いけ。一息で全部飲んでいけ」と言  
って送り出したら、初球が逆転サヨ  
ナラ場外スリーランでした。これが、  
私の夏の監督生活の初戦なんです。  
私学の監督は厳しいので、監督就  
任早々、開幕ゲームで初戦負けだ  
ったら、辞めさせられていたかも  
しれません。

それが初戦なんです。そうしたらも

う怖いものないですよ。創部以来、  
明徳は高知商業に一度も勝ったことが  
なかったんですが、準決勝で高知商業  
と当たって、延長13回の末に創部以  
来初めて勝ちました。そして、決勝は  
普通に楽に勝ちましたけど。監督に就  
任して初めての夏の大会で甲子園に行  
きました。甲子園でも1つ目勝って、  
2試合目に沖縄水産に負けたのかな。  
でも、野球の厳しさとか、難しさ  
とか、面白さとかね、やっぱり高  
校野球は本当に凄い。どこかの監督  
に「青春は密ですね」と言った人も  
いますが、高校野球はやりがいある  
なと思いました。

そして、2年目の平成4年の夏も甲  
子園に行ったんですよ。その夏が松井  
秀喜を5つ敬遠してね、あれ以来、私  
はヒール役ですよ。私の徳の無さだ  
からでしょうけど。あれが灘みたい  
な進学校が甲子園に行って、松井秀  
喜相手に5つ6つ敬遠して勝ったら、  
よくやると称賛されると思いますよ。  
でも、ルールを別に犯したわけじゃ  
ない。私は、松井秀喜の後の5番バッ  
ターには5回チャンスをやっているん  
です。5回のうち1回でも打ったらヒ  
ーローなんです。それで打てなかつ  
た。勝負してほしかったと言われま  
したが、私は決して間違っていない。  
もう1回打席が回っていてもやるね。  
だって、ルールを犯したわけでもな  
んでないんだから。当時の新聞で、  
今オリンピック協会会長の柔道の山  
下泰裕氏が、「当たり前や」と言いま  
した。「我々は日の丸を背負って、  
最初にポイントを取ったら、反則を  
取られないようにうまく逃げて逃げ  
て最後まで時間を持っていく。これ  
は当たり前の話で、国を代表してや  
っているのだから」と。ビートたけ  
しも言っていました。「相手の弱い  
ところにサーブ打つのが当たり前だ、  
得意なところへサーブを打つバカ  
がどこにおるんだ」と。その通り  
ですよ。

でも、大概言われましたけど。遠  
征に行ったら、明徳のバスは傷つけ  
られたり石を投げられたりで、相  
当だったんですよ。当時、選手は  
かわいそうでしたが、「お前ら胸張  
るとれ」とは言ったんですけどね。  
この中で1人でも2人でも、将来、  
指導者になったらね、そういう気  
持ちで頑張ってもらいたいですよ。  
やれますよ、やる気になったら。  
司馬遼太郎さんが言われるには、  
男がやりたい仕事は3つあるら

しいです。連合艦隊の総司令官とオー  
ケストラの指揮者、そしてもう1つ  
は高校野球の監督だとして書いていま  
した。なるほどと思ったんですけどね。  
この中で1人でもそういう人間にな  
ってほしいです。私も、大島から出  
て三瓶に育ててもらって、今本当に  
いい思いをさせてもらっているんです  
が、野球に限らず、諦めずにやっ  
ていたら、きっといいことがあると思  
いますよ。自分がこれだと思ったこ  
とをやるんだしたら、棚ぼた精神で  
頑張っただけでやったら、きっと  
いいことがあるんじゃないでしょ  
うかね。

そして、2002年に優勝したん  
ですけどね。この優勝も不思議な  
話で、予選の準々決勝でほぼ負けて  
いたんですけど。岡豊高校と対戦  
して、負けかけていたのをひっくり  
返したんですけど。9回裏の相手の  
攻撃がノーアウト満塁ですよ。もう  
やられたと思ったのを0点で抑  
えて勝って。それで甲子園に行  
けて、3回戦で常総学院に逆転で  
勝った時に、これはもう勝てるな  
と思しました。あのチームは不思議  
なチームで、センバツで福井商業  
に負けてから夏の全国優勝まで、  
練習試合、四国大会、県大会、全  
部含めて一敗もせずに58連勝し、  
58連勝目が全国優勝でした。常  
総学院に勝った後、広陵、川之江、  
智弁和歌山にも勝ったんですが、  
私はもうミーティングをやらな  
くしたね。「もうやらなくていい。  
おまえら負けかけた試合が何試合  
もあるのに55連勝しているんだ  
から、あと3つくらい普通にや  
ったら勝つ。もう変なこと考  
えることない。思い切ってやれ」と。  
ああいう時は強いですよ。監督は  
選手を信頼し、選手は監督を信  
頼する。

決勝戦の前日は取材が9時くらい  
まであって、みんな疲れてね。練習  
グラウンドが寄宿舎から歩いて5分  
くらいのところにあっただけで、  
「決勝戦は13時からだから、11  
時に朝飯と昼飯にして、9時から  
9時半頃にそこでちょっとアップ  
やって、それから飯にするぞ。だ  
からお前らゆっくり寝ろ」と言  
ったんですよ。その夜に、前乗り  
で応援に来てくれていた三瓶の先  
輩方が来てくれて、私は一緒に飲  
んだんですよ。明日の試合を心配  
してくれて、お前早く帰れと言  
われて宿舎へ帰ったんですが、も  
う明日勝ったら夢に見た日本  
一だと思ってなかなか眠れな  
くした。



決勝戦の当日、私は朝早くから先に練習グラウンドに行って、汗をかこうと思ってウォーキングをしていたんです。すると、選手が8時半頃からゾロゾロ来るわけです。予定より30分も早いのに、みんなが汗をかかないといけないと思って、指示もしていないのに30分以上前から1人また1人と増えてきて。そして、キャプテンの森岡良介が、私のところに来て「監督。今日、監督を男にしますから」と言った時にはね、ほろっと来ましてね。これは、今日は日本一になったなど、試合の前に思ったんです。本当にそういうことって一生に一度か二度はやっぱりあるんですね。本当にあの優勝は嬉しかったですよ。

日本一になる10年近く前から、三瓶で三瓶高校野球部の先輩方が「馬淵を日本一にする会」を作ってくれているんですよ。ここまで応援してくれたらと思うけど、そんなにしてもらってもなかなか日本一にはなれないですよ。でも、なれたんですよ。その「馬淵を日本一にする会」から時計をもらって。時計と一緒に年に一度くらい三瓶に帰ってきて話したりもしているんです。新たに去年から「馬淵を再び日本一にする会」と会の名前を変えま

してね。もう一度日本一を狙ってやろうと思って、今やっているところなんです。

本当にこの優勝は忘れられません。あの当時が高校野球の参加校が4,301校で1番ピークだそうです。4,301校の中の1つも負けていない1チームだけが日本一になれる。優勝した日の夜、私は本当に優勝旗に頬ずりしながら朝まで優勝旗を抱いて寝ました。優勝旗は35kgもあって、深紅の大優勝旗というんですかね、もう立派なものでしたね。それからもう泣かず飛ばずで、私も甲子園で今54勝36敗ですか。甲子園でもう90試合近くやっているんですかね。そんなに何試合もやったという記憶はないんですけど、そこまでやったかという感じです。

最後になりますが、日本は一昨年のワールドカップ31回大会で久しぶりに銅メダルを取ったんですよ。そして去年が初優勝だったんですが、31回やって1回も優勝がないというのはおかしな話で、松坂大輔の時でも、大谷翔平の時でも、佐々木朗希の時でも取れなかった。日本のやるバントなどを絡めた野球で勝てたのは本当にラッキーだったと思っています。

諦めかけるんですよ、人間は。でもね、

ダメかと思わないようにね。ダメかと言口には出しても、腹の中では絶対俺はまだやれると思って頑張ってもらいたいですよ。勉強にしても何にしても。野球に限らず、やるんだったらいろいろなことに取り組んでね。もう一度言いますが、棚た精神で頑張ってくださいよ。いつ落ちてくるかわからないところでぐっと歯を食いしばって頑張ってくださいよ。きっといいことがあるしね。私みたいな人間でもやれるんだから。頑張ってやったらきっといいことがある。ただ、勝つことだけが全てじゃないけど。勝つことだけが全てじゃないけど、何事にもやっぱりそういう気持ちで取り組んでもらいたいと思います。

本当にここに50年ぶりに来たんですよ。50年前の予餞会で、私はここで北島三郎の兄弟仁義を歌ったのを覚えています。すごくテープが飛んできてね。ここに上がるのはあれ以来でした。今日はどうもありがとうございました。

令和元年  
2019



令和2年  
2020



令和3年  
2021



令和4年  
2022



令和5年  
2023



令和6年  
2024





正門前で秋の収穫風景（大正10年頃）



修学旅行（大正14年）



第8回尚歯会（昭和3年）



第二山下高等女学校の泉（後の「コギトの泉」）（昭和4年）

# あ の 日 あ の 時

## H I S T O R Y



作法実習（昭和6年）



校門（昭和8年）



排球部 大森先生と（昭和8年）



卒業生による能の演技（昭和12年）



第二山下高等女学校全景（昭和15年）



家庭科被服実習（昭和15年）



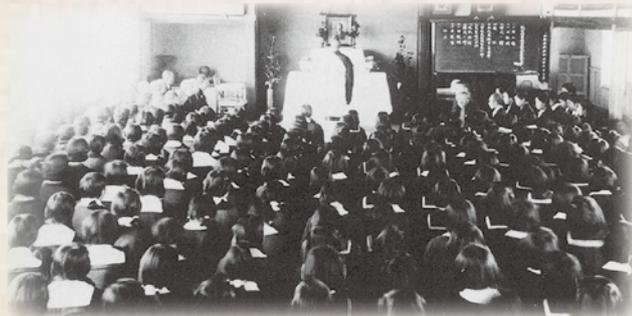
山下理事長講演 (昭和17年)



第1回家庭科専攻科修了生 (昭和17年)



ある雪の日 (昭和18年)



故山下亀三郎氏葬儀 遥拝式 (昭和19年)



もみすり (昭和21年)



山下西南中学校運動会 (昭和22年)



県立三瓶高等学校第1回卒業生 (昭和24年)



仮装行列 (昭和27年)



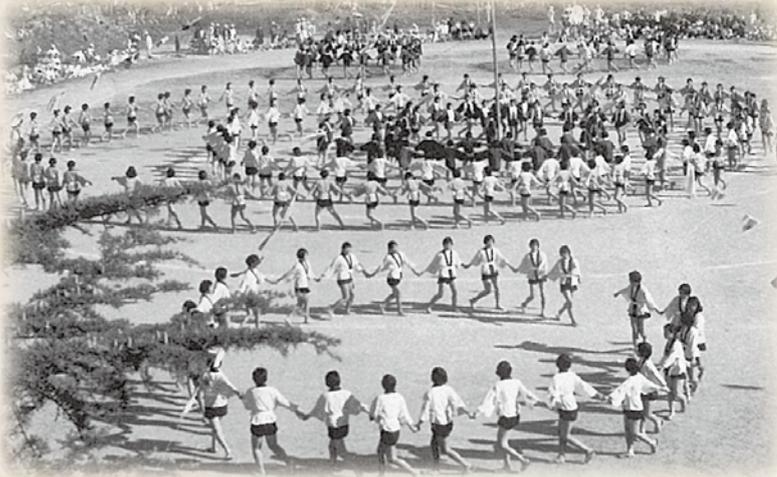
遠泳大会



家庭クラブ (昭和29年)



三瓶高校定時制第1回卒業式 (昭和29年)



運動会ダンス（昭和35年）



女子バスケットボール部全国大会出場（昭和35年）



文楽部（昭和39年）



定時制体育祭（昭和42年）



定時制体育祭（昭和46年）



卓球部四国大会団体優勝 小野誠治ランキング賞（昭和48年）



定時制遠足（昭和51年）



県定通制総合体育大会（昭和53年）



定時制予餞会（昭和54年）



本館・山下記念館落成（昭和55年）



定時制生活体験発表会（昭和58年）



邦楽部全国高校総合文化祭出場（昭和60年）



定時制最後の卒業生による記念植樹（昭和61年）



定時制課程開校式（昭和61年）



野球部夏の大会ベスト8（平成2年）



修学旅行（平成7年）



文化祭 県下の高校から平和を願って寄せられた鶴（平成10年）



サバイバルウォーク（平成11年）



釣り大会（平成13年）



体育祭（平成13年）



クラス対抗リレー（平成15年）



陸上部全国高校駅伝大会出場（平成15年）



文化祭 プロとの共演（平成17年）



修学旅行 中国上海（平成19年）



語の日登校風景（平成17年）



朝の読書タイム（平成20年）



マラソン大会（平成20年）



奥地の海のかへにばる 人間カーリング(平成21年)



バレー部90周年記念招待試合(平成22年)



サバイバルウォーク(平成23年)



淋浴実習(平成23年)



センター試験激励会(平成24年)



体育祭(平成24年)



就業体験(平成25年)



1年生集団宿泊研修(平成25年)



奉仕活動(平成26年)



修学旅行 みかん配布(平成26年)



ヘルメット贈呈式(平成27年)



堀内遥平 国体少年Aやり投げ3位(平成27年)



グループ結団式 (平成28年)



邦楽部全国大会出場 (平成29年)



歯科教室 (平成28年)



カンナフラワー講習会 (平成29年)



シャッターアート (平成30年)



ジオガイド (平成30年)



体育祭 (令和元年)



野球応援3年連続優秀校 (令和元年)



コロナ感染対策 (令和2年)



地域未来留学 (令和3年)



家庭クラブ新入生教室装飾 (令和4年)



卒業式 (令和5年)



最終年度スタート (令和6年)

## 編集後記

---

たちばなの花は薫り、みんなみの潮はひびく、海山の静かなる美しき三瓶の地に、本校は大正9年に第二山下実科高等女学校として設立され、大正13年に第二山下高等女学校に変更、昭和22年に山下西南中学校を併設、昭和23年に愛媛県立三瓶高等学校となり、定時制も開設するなど、105年に渡る長い間、地域に根差し、地域に愛され、地域とともに発展してその名をひびかせてまいりました。そして、11,108人という多くの卒業生がこの学校で学び、希望を燃やし、理想をいただき、瞳を輝かせて、数多くのかけがえのない思い出を胸に巣立っていかれました。このような伝統ある学校がついに105年の歴史に幕を下ろすこととなりました。

本記念誌の作成にあたり、多くの写真を掲載することで本校の思い出を振り返ることができるものになればと考えました。また、多くの方から閉校に際しての思いをお言葉にしてご寄稿いただきました。この編集作業を通して、本校の歴史の深さや重みをひしひしと感じるとともに、写真の皆様の表情やいただいたお言葉から本校の息吹を感じ、皆様が本校でいかに充実した学校生活を送られてきたか、そして、本校がいかに旧職員や同窓生の方々に愛され、保護者や地域の皆様など多くの方々に支えられてきたか、改めて実感することができました。だからこそ、より一層、閉校になることが残念でなりません。

最後になりましたが、本記念誌の作成に際し、貴重な資料や寄稿文をお寄せいただきました関係者の皆様に厚くお礼を申し上げます。また、本校にこれまで温かいご支援をいただきましたことに心から感謝申し上げます。ありがとうございました。本校は閉校になってしまいますが、皆様のお心の中で、今もなおそびゆる学び舎であり、コギトの清き泉の流れが尽きないことを祈念して編集後記といたします。

## 編集委員一覧

---

木藤 江梨香・野村 知世・二宮 章・廣本 和也・二宮 真二

## 愛媛県立宇和高等学校三瓶分校 閉校記念誌

---

発行／令和7年3月1日

愛媛県立宇和高等学校三瓶分校

〒796-0908 愛媛県西予市三瓶町津布理3463番地

TEL 0894-33-0033 FAX 0894-33-0538

URL <https://mikame-h.esnet.ed.jp/>

印刷／小野高速印刷株式会社

〒870-0913 大分市松原町2丁目1-6 TEL 097-558-3444 FAX 097-552-2301

※掲載されている各種資料・写真は、デジタル化され当社内に保存しています。



三

瓶

高

校

・

分



校

あ

り

が

と

う





Uwa high school  
mikame branch